

高等学校グランドデザイン会議第2回東青・下北地区部会概要

日時：平成18年12月11日(月)

13:30～16:00

場所：青森県教育庁会議室

<出席者>

佐々木(昭)部会長 遠島副部会長 石橋委員 木村委員 工藤委員
佐々木(司)委員 田村委員 馬場委員

開会

司会

第2回東青・下北地区部会を始めさせていただきます。今回は2回目でございますので、部会長をはじめとする委員の方々、また、事務局側の紹介も割愛させていただきます。早速ですが、事務局から本日の説明を申し上げますので、よろしくお願いいたします。

検討会議・専門委員会概要説明

事務局

資料1は専門委員会での検討状況を集約したもので、第1専門委員会分という事になります。そして資料2の方が第2専門委員会分という事になります。そして資料3が前回の地区部会の総括という事になります。前は9月で大分時間も経ちましたので、改めてこれまでの開催状況と地区部会の趣旨等を確認の上、資料1と資料2を説明させていただきます。

【事務局が、配付資料に基づき説明】

司会

これで事務局からの説明は終わります。意見交換につきましては佐々木部会長に進行をお願いいたします。

意見交換

佐々木(昭)部会長

これから意見交換という事です。多分直前に委員の皆さんの所に資料が届けられたと思いますが、その資料の中身について今説明をいただきました。我々の立場とすれば、

説明された第1専門委員会、第2専門委員会の意見と構想について、地区としての意見を申し上げるという趣旨だと思っています。専門委員会の方の意見もそうですけれども、結論と言いますか、全体をこの方向で行くというような事でもないようです。それについて私達の意見を採決して1つの方向性を決めて行くような事でもないだろうと思います。自由にそれぞれの立場で意見を出していただければと思います。中には地区としての意見を出しにくいという項目もあるだろうと思いますが、そういった場合には教育論と言いますか、青森県の高校として全体的にどうあればいいかという立場でお話しただければという考えです。資料1、資料2についての意見交換については、この後約1時間程度を目処にして第1専門委員会、残りの時間を使って第2専門委員会についての意見交換という事にして、1回休憩を取りたいと考えています。遅くとも全体的には16時までには終了したいと思っていますのでよろしくお願いします。

それではまず最初に資料1を見ていただきたいと思います。検討課題の順序に従ってそれぞれの意見をいただきたいと思います。最初に の1学年あたりの適正な学級数という事で、この につきましては第1専門委員会もそれから高校長協会も、市部、町村部について少しでこぼこがありますが、趣旨としては大体学級数がそういう数字で共通的に出てきているという感じがします。これについての意見を自由にいただきたいと思います。まず第1専門委員会の検討状況を見ると、大前提が教育の機会均等と本県の高校教育の水準、環境の維持・向上を大前提として、そのためには教員配置が絶対必要な条件だという事から、市部の学科では1校につきこのくらいの学級数が望ましいという意見ですがいかがでしょうか。それぞれの地区においては、既に校舎化とか、あるいはもっと少ない学級数の学校を抱えている地区もあるとは思いますが。

A委員

まだ資料にしっかりと目を通していないので、書いてあるのかもしれませんが、この専門委員会の部分と高校長協会の部分について、専門委員会の方は市部の普通科が2つに分かれていますよね。市部については、普通科(進学校)と括弧で但し書きが付いたものと、普通科の2つがあるのはどういう事ですか。

事務局

括弧が付いている方は、専門委員会の協議の中では高校長協会の意見を参考にしながらも、専門委員会内では進学校については6~7学級あればいいのではないかと、という意見があるという事です。

A委員

そうすると、特に普通科を2つに分けるという事ではないのですね。進学校という意味がちょっと分からないのです。普通高校であればどこでも進学する訳ですから。そういう意味ではないのでしょうか。

事務局

進学校の定義までは踏み込んでいません。

A 委員

高校長協会の意見では一本化されているのですけれども、専門委員会の方はちょっと微妙です。具体的に言えばどういう事なのでしょう。青森高校が進学校で、後の普通高校はどこだろうという事になりますので、これから検討し詰めて行くのだと思いますが、資料などを読んでみても範囲が広くて、どこに絞って話をすればいいのか掴めない部分があるのではないかと思います。きちんと決めていかないと、また堂々巡りになって元に戻ってしまう可能性があると思いましたので聞いてみました。

佐々木（昭）部会長

専門委員会の、進学校とそうでない学校については、はっきりした基準や色分けがないのでしょうか。進学をメインにした学校と言いますか、進学者が多く出ている普通高校と、就職者の数が相当数いる普通高校くらいの感じなのではないかと思います。そこで普通科の目的は何かというと、高校長協会の普通科の在り方の所に書いてある、普通教育に関する各教科・科目の学習を通して、各教科の基礎学力や広い教養を身につけさせる部分をメインにした普通高校と、上級学校への進学に対応できるようにするという後段の方に主力を置いた普通高校、そのくらいの違いではないかと思います。

B 委員

資料を見せてもらいましたが、素直にこの3校が進学校で後は普通高校というように読んだのですが。

佐々木（昭）部会長

3校というように限定する事は危険な感じがします。そういった事も含めて自由にお話ししてください。

C 委員

私は下北地区の事をお話したいと思います。御承知のように大畑高校、それから川内高校が校舎化になっていますが、中身は1学級、しかもそれが100名にもなっていないという現状です。普通科なのですよね。つまり少ない人数の中で進学する人と、就職する人が分かれているのかというと、分ける訳にはいかないのです。そういう現状を考え、将来的に子供達の事を考えると、いずれ統廃合はやむをえないと思わざるをえません。地域の間人としてちょっと言いたくない事ですけども、郡部としてこれは涙を飲まざるをえないという気がします。進学校とそうでない普通科という話が出ましたが、

今はほとんどが、職業校も含めて進学なのです。私は第2専門委員会にも出ていますが、私は大学へ行く事だけが喜ばしい事ではないと思っています。進学率が上がる事は必ずしも喜ぶべき事ではないのではないのか、できれば高校を卒業して地元で仕事に就くような子供達を育てる事が大事ではないのか、と思います。先程の説明の中にも色々ありましたが、一般常識をきちんと覚えてもらう事が先決で、それが世の中に出てためになるのです。必ずしも専門的な知識を必要とする企業は県内には少ない訳です。そういう事を色々考えて、下北の場合はここに書いてありますけれども、できるだけ進学と就職に分ける、昔は2年生から分けたものでしたが、そういう形が非常に良いのではないかと考えています。

佐々木(昭)部会長

後の方はいかがでしょうか。これも条件と言いますか、環境や状況が数に大きく影響してくるのだろうという感じもします。

A委員

分校の部分の但し書きについて、主として通学と地理的な条件というような事がありました。これは高校長協会の方では問題にならなかったのでしょうか。

事務局

高校長協会からは、右側に書かれている意見が全てになります。意見について割愛はしていません。出されたものをそのまま表記しています。

A委員

本当に悩む部分はこういう分校とか地域に絡めた部分が最後の検討でもめる部分になるのではないかと思いますので、後回しにはできないと思います。

佐々木(昭)部会長

この専門委員会の分校というのは、現在校舎化が考えられている学校と捉えていいのですか。

事務局

校舎化の学校もそうですけれども、学級数が1学級という事については、ルールとしては最低限2学級という事ですので、分校にはなりません、あくまでも1学級をやむをえず残す場合、やむをえず分校になる場合は特色を持たせて存続させるという事です。

佐々木(昭)部会長

つまり現行のスタイルがどうであろうと、町村部に2学級以下の学校が仮にできた

しても、通学状況などを考えるとやはり考慮する要素をたくさん持っている学校は特色を持たせて存続する、というくらいの位置付けですか。

事務局

そうなります。町村部において最低限2学級という原則を決めた上で、やむをえず2学級にならない所は、という事です。

A委員

校舎化を維持できなくなった場合でも、存続させる可能性があるかどうかという事ですよね。

事務局

そういう事になります。

C委員

それは通学の手段をつけた上でやらないと旨く行かないですよね。今もスクールバスはどうなっているのでしょうか。県でお金を出しているのでしょうか。

事務局

スクールバスについては、県費は出していないです。

C委員

検討課題の中には入らないかもしれないけれど、やはり統廃合を考えるとこの事になると、当然通学の手段も講じてあげますという事でないと、なかなか地元の理解は得られないと思います。

B委員

自分も正に同じ意見です。確かに40人という定員があって、生徒の減少を考えればなんとかしなくてははいけません。それは確かに分かるし、そうせざるをえないというのも分かるのですが、前回にも話しましたが、経済的に非常に苦しい状況の子供達や親がいます。そういう所では、勉強したいという子供達がいながらできない状況があるので、そういう事もちゃんと踏まえながら並行して支援して行かなくては、ただ減らしますというのでは大変だと思います。例えば奨学金であるとか、先般話したような寮の問題であるとか、そういう事も含めながら並行して会議を進めて行かないと、数だけ減らしました、よろしく願います、と言ってもこれは大変なのかなと思います。

佐々木(昭)部会長

1 回目の会議の時にも出ていましたけれども、通学できないという事になった場合は何か考えなくてはいけないのではないかという意見も出ていました。専門委員会の話によると、要するにその地域から無理してでも市部の学校に通っている、あるいは出てきている子がいます。しかし、そういった事を経済的な面でなかなかできにくい子もいます。それに対して、例えばこれから県としてスクールバス等の補助を出すというように、格差と言いますか、そのような部分も考えなくてはいけないのではないか、という事があったような感じがします。

事務局

補足させていただきますと、現状でもスクールバスがない状態で遠い所から時間とお金をかけて通って来ている生徒がいる中で考えると、例えば、その学校がなくなった時にその高校の生徒だけに支援するというのは、県としてなかなか説明しづらいという事情を、別な会議の時に事務局から説明しています。

C 委員

それは前から学校がなかった地域の人達が、青森に行ったり、八戸に行ったり、私のクラスなどもそうでしたが、農業高校に行ったりというような事を、各個で考えてやった訳ですよ。しかし、実際にある学校がなくなり、そこに入ろうとしていた40人が皆自費で市部へ出て行かなくてはならないという事とは違うのではないかという気がするのです。専門的な道に進みたいのでこの郡部の学校ではとても間に合わないから中央へ出て行くのだ、という子供達は当然あって当たり前です。今までもずっとあった訳ですから。これは格差という話が出ましたけれども、実際に存在する学校がなくなるという時には、これは考える必要があると思います。そうでないと地域の理解はなかなか得られません。そうでないとかなりの抵抗があると思います。

佐々木(昭) 部会長

この事について、県として仮に難しいのであれば、例えば市町村や自治体を巻き込んだり、何かの支援団体ができるよう働きかけたり、そういった所と協力して行くような方策を考えて行く事が大事ではないかという感じがします。思い切って統廃合するという時に、ある学校にその地域から子供達が通える方策を県が措置するという事よりも、県が指導して協力体制を作って行くという感じが必要なのかという気はします。学級数を考える時には、様々な要素が入ってくるのですね。

遠島副部会長

通学に対して色々な議論が出ているようですが、1 ページではその分校の所にどうしてもやむをえない所のみ特色を持たせて存続させるというのは、通学等の地理的条件を考えると言う事ですので、今の話のような学校については検討委員会の方向性では残し

たいというように言ってるのではないかと思うのですが、そういう認識でよろしいのでしょうか。

事務局

そういう学校も出てくるだろうという事で、そういう部分も考えなければいけないのではないかという意見があったという事です。

遠島副部長

補助については東通村が大分前から生徒に補助をしていて、スクールバスという形で運行し生徒が乗って来ています。それからむつ工業高校ですが、佐井から朝5時頃に出て、学校に7時半頃に着くというバスに乗って来ています。それは地域の保護者がバス会社と契約して、安いお金で乗らせてもらうという事です。以前は寮があったのですが、寮の運営が大変だという事や、生徒達が親元から離れているという事もあり、精神的な面や生活指導面で大変問題があったのでスクールバスを運行させる事で通学を確保しようという方法に変更したら、子ども達の学校生活が非常に安定しました。親元から通う事ができるという事で、生活指導上でも良好な状況になってきたという状況がありました。同じように川内、脇野沢からもスクールバスが出ています。それには3校の生徒が乗って来るという事です。東通村以外は補助は出ていないです。

佐々木（昭）部長

自治体としてバックアップしてるのは東通村だけですか。

遠島副部長

東通村だけです。

佐々木（昭）部長

後の問題は保護者の負担ですか。

遠島副部長

そうです。逆にむつ市から川内高校へ行くとか、そういう生徒も契約したバスに乗って行くという逆の場合もあります。

佐々木（昭）部長

下北地区には今のような例があるという事ですが、東青地区にはないですね。この通学上困難というのは、そういった公的な交通機関の影響が大きいです。

C委員

大きいですね。今下北では大湊線がなくなるのではないかと考えているのですが、そうになると交通機関がなくなり大変な事になります。これは県と自治体という形でやるしかないとは思いますが。学校だけという訳には行かないでしょうから。

遠島副部長

市部について、先程その進学校とはどういうものだろうという話がありましたが、私はこれを見て、田名部高校を進学校に入れてあります。それで、第3回の専門委員会の概要を見ますと、6～8学級という数が出ていて、そして意見として7学級という奇数はカリキュラムの性質上あまり旨くないので8学級がいいという意見が多かったのですが、どうしてここで7学級というようになったのかお聞きしたいです。8学級を排除してしまうと旨くないので、6～8学級という事にさせていただければありがたいと思います。

佐々木（昭）部長

これは事務局に回答を求めるという事ではなくて、次の検討会議の時に私達の地区からこういう意見も出ましたよと話をしたいですね。今勝手に数字を変えてくれという訳にはいきませんから。事務局は記録しておいてください。

の普通科、職業学科と総合学科の在り方についてはどうでしょうか。専門委員会では、普通科を増やした方がいいという意見が多いという事でしょうか。そういう雰囲気なのですかね。（ア）の目指す役割と（イ）の全県的視野での募集割合、地区毎の募集割合を合わせて進めましょう。普通科、職業学科と総合学科の在り方については、将来どうあれば良いかという事ですね。（2）の地区毎の募集割合みたいなものも出ていますので、これをチェックするのでしょうか。専門委員会の方はこの事については、特に深まった議論はしてないようなイメージがあります。普通科、職業学科、総合学科について何か意見はありますか。下北地区では大湊高校が総合学科ですが、在り方はどう考えれば良いのでしょうか。

遠島副部長

ほとんどの保護者及び生徒がまず普通高校に進学したいと考える現状、という認識のようですが、私自身はこのようには捉えていなくて、例えば、工業を目指す生徒はものづくりであるとか、工業高校で工業的なセンスを磨いた上で大学へ行って工学を勉強する、という目的を持った子供達がたくさん来ます。従って普通科を増やしてもいいのではないかという意見は、それはそうだろうと思いますが、認識の面で普通科志向だけではない生徒もいるのです。その辺は是非認識を新たにさせていただければと思います。

佐々木（昭）部長

専門学科の中で工業は特別なのですか。子供達の意識の面から見ても、工業というと、よし、ひとつ進路に、というものがある感じがします。後は、例えば商業や農業あたり

の学科について、中学校の先生がいますのでどうでしょうか。

A 委員

工業だけではないと思います。商業にしても、例えば情報やそういう分野で将来はそういう関係の仕事に就きたいから選んで行く生徒も結構います。

遠島副部長

商業も資格などで頑張っています。

佐々木（昭）部長

そうしますと、専門委員会のこの認識についてはどうですか。

A 委員

ただ、普通科を増やしてもいいという背景は、どこかに出てきていたが、例えば今の職業学科を出ただけでは即戦力にはならないという社会の面がある訳です。より高いものを求めなければ使い物にならないと言うとおかしいかもしれませんが、より水準の高い実力を持った生徒が必要だという事が出てきたのではないかと私は解釈していました。

佐々木（昭）部長

でもこの意見は、現状は違うと書いてあるのですよね。

C 委員

私は、どういう過程を経てこういうものができたのか良く分かりません。農業高校、工業高校、商業高校というものは昔からあったのですが。これはいわゆる普通高校へ入りたいのだけれども、合格ボーダーラインすれすれだという人が、商業高校へ行ったり農業高校へ行ったり、いわゆる総合学科の方を選んで行ったり、という事があるのではないのでしょうか。中学校からほとんど100%に近い高校進学率な訳ですから、いかにして高校へ入れるかという歯止めなのではないかと私は見えています。

D 委員

現役の中学生を持つ父親としましては、先程おっしゃったような、一昔前とは違う工業高校、商業高校であると分かりました。先程遠島先生がおっしゃいました、志を持って工業高校へ行く、商業高校へ行くという生徒もたくさんいますけれども、中学校側としてはほぼ100%に近い進学率という事で、キャパの中に旨く子ども達を入れてあげようという思いも確かにあるのは間違いない事です。地域ではどうしてもランクが付けられてしまいます。例えば青森では青森高校というようにランクを付けられてしまいま

す。同じ普通科が何校もあるのですけれども、点数によって君はA高校、君はB高校という形になっているのが現状だと思います。それは例えばむつ市におきましては田名部高校が普通科、大湊高校が総合学科、むつ工業高校等がありますが、やはり先程書いていましたが、普通科志向が非常に強いです。高校卒業して即戦力というのはなかなかままならないのが現状でありますし、どうしても進学率も年々高くなる状況で、むつの方でも進学という部分に関しては年々随分高くなってきています。そういう部分に関して、どうしても普通科を第一に考えるという意味では、先程言ったとおり工業高校を本当に目指したい方は一部の生徒であって、後の子ども達に関しては、どうしても地元の高校に行きたいという事であればそちらの高校に受験させられるというのが、ある程度の現状だと思います。これは県内、多分県内だけでなく全国そうかもしれません。

佐々木（昭）部会長

間違いではないと思います。保護者及び生徒はまず普通高校へ進学したいと、これは間違いではないですよ。ただ、中にはちゃんと最初から専門高校を希望する子もいますが、全国の割合と乖離と書いてありますが、要するに青森県は普通科の割合が少ないのですか。

事務局

全国の割合に関しては、普通科70%、職業学科25%、総合学科5%ぐらいです。青森県を除く東北5県では、普通科61%、職業学科30%、総合学科7%です。青森県の場合は、普通科58%、職業学科33%、総合学科8.4%になっているという状況で、全国に比べ普通科が低い割合にあります。全県別に調べてみたのですが、地方は職業学科の割合が高いようです。

佐々木（昭）部会長

そういう意味では専門学科を作った時に、青森県の産業構造等が加味された配置だったのででしょうか。専門委員会ではこういう議論もあったという事なのですが、特にそれほど専門委員会も深まった話題になりにくい課題だったとは思いますが。

B委員

全国と比較して青森県の教育を考えると、全国を視野に入れてという考え方は本当に必要なのでしょうか。今の子ども達の現状や色々な教育制度を青森県で考えて、その中で方向性を見い出して行けばいいのではないのでしょうか。

F委員

それは大事だと思います。やはり新聞を見ても県民所得が日本一低いですし、全国を視野にした次世代の子ども達の育成というのが、もしかしたら大事なのではないかと思

います。次世代がずっと最下位という訳に行きませんし、私は一親として、商売人として嫌です。出張して大きい街へ行くと格差も感じますので、やはり他の地域も視野に入れながらの研究が必要だと考えています。

C 委員

学力の大体の今のパーセンテージと言いますか、いわゆる学力平均というものがあるのではないですか。

佐々木（昭）部会長

進学率はありますけれども、学力の平均の比較というものはないと思います。

A 委員

大学進学率との相関はやはりあるのでしょうか。

事務局

それは分かりません。このデータを調べた所では、その地区、県によって割合は全部バラバラです。南の方では更に職業学科の割合が高い県もありますし、また都会では少ない割合の所もありますので、それぞれの地域によって異なっています。

A 委員

普通科に行ったから大学を目指す生徒が多いという相関はないという事ですか。

事務局

調べていないので分からないという事です。

A 委員

普通高校というと、就職する前にもう1ランク上に行って勉強してからというので、そういうような割合になるのかなと私だったら考えてしまいますが。

佐々木（昭）部会長

相関がないとは言えないでしょうね。

C 委員

今はそう考えるべきではないですか。

佐々木（昭）部会長

工業系の大学へも普通高校からは行きやすいでしょう。技術系にしても普通高校が行

きやすいという事もあるでしょう。

A 委員

しかし、青森県としては、経済力等の面で、中央の大学まで行かせる力を家庭が持っていないければやむをえないという事もある訳です。そういう意味では反映されているのかなと思います。

佐々木（昭）部会長

専門委員会の方でも話は出てきますが、むしろ今は専門高校の方が逆に進学率が上昇している傾向があるのです。影響しあってる事もない訳ではないと思います。

E 委員

私は昨年まで高校の方に関わっていましたが、職業高校でも進学率が上がっていると言いますが、今は職業高校で終わっても就職がまずありません。私の子どももそうですが、そういう事で就職がないので進学しようという雰囲気が増えているようです。それで職業高校の進学率が上がってきているのが現実だと思います。県外の就職を考えると結構就職はあると言いますが、地元の就職がほとんどありません。それだったら、どうせ地元にいるのだったら短大でも大学でも進学しよう、という子供達が多いようです。

B 委員

大学の推薦枠というものを、職業科に入った子ども達がそういう枠を使いながら進学して行くという現実もあります。そういう事を考えた時に、普通科を増やしたおかげで大学へエスカレーターでどんどん行くという生徒が増えるという気もするのですが。教え子の中にも普通科に行った子と職業科に行った子がいますが、大学に行きますと職業科に行った子が来て、なんでと聞いたら、推薦で決まりました、という事がありました。そういう方法を使えば、どんどん東京の方に行けるのかなとも思いました。上級に行く事が良いか悪いかは分かりませんが、そういう方法もあると思います。

佐々木（昭）部会長

それぞれの学科には様々な特徴がありますから、単純に増やすとか減らすとかという議論は避ける事にして、次に行きましょう。3ページの適正な学校規模を実現するための方策という事で、(ア)全県的視野での統廃合の必要性和可能性、(イ)統廃合の進め方、(ウ)地区毎の学校配置、これは分けて進めましょう。新しいタイプについてです。専門委員会の全体的な雰囲気とすれば、統廃合はやむをえない、そして新しいタイプを作る時にはちょっと慎重に考えなさい、という感じです。地区毎の配置を考える時には6ブロックという考え方を踏襲するという意見と、それをどう考えるかという事です。

そういった意見が出ているようですがいかがでしょうか。先程のお話では、要するに統廃合はやむをえない状況ではあるのだけれども、それに対する手当はちゃんとしてくれという事です。まず私達に与えられた使命は、子どもの数が少なくなってくるので全体的に学校の在り方を考えましょう、というような事が大きな前提ですから、統廃合は避けて通る事はできないのかなという感じもします。いかがでしょうか。

E 委員

統廃合しなければ学校の運営が成り立って行かないのではないかと思います。学級数が減ると職員数が当然減らされてしまい、そうなると学校運営が成り立ちません。例えば1つの例として、私が昨年度まで関わっていた高校でも、学年で学級数が1つ減りました。それによって、勉強もそうですけれども、一番最初にクラブ活動に支障が出てきました。要はクラブ活動を指導する先生がいなくなってしまったからです。そして先生達に余裕がなくなってしまいました。という事を考えると、いわゆる子ども達が快適に勉強する場を提供するためには、やはりある程度の学級数、イコール職員数が必要なのではないかと思います。ですから確かにこれから先子供達が減って行く中で、統廃合はやむをえないのかもしれませんが、やはりそれに対する手当を充分に考えて進めて行かなければいけないのではないかと思います。

佐々木（昭）部会長

専門委員会では、適正な学校規模を実現するための方策として、統廃合以外の選択肢はありやなしやという所で、なしという意見なのですが。

C 委員

これだけは異議無しと言わざるをえません。

佐々木（昭）部会長

そうですね。子どもの数が少なくなるのに学校の数が変わらないとなると、学校の維持管理にかかる負担等を考えると、このままでは大変になってきます。

C 委員

小中学校の現状もそうになっていますから。

佐々木（昭）部会長

そうすると次の統廃合の進め方に関わるのですが、統廃合による新しいタイプの高校の可能性はどうだろうか、という所です。専門委員会は財政面を考えると無理ではないかという意見ですが。

C委員

我々は別に財政面を考える必要はないとは思いますが、更に新しい学校をというのはちょっとどうかと思います。

佐々木（昭）部会長

これはむしろ第1専門委員会の時のパターンです。例えば、いくつかの専門高校を一緒にして新しい産業高校みたいな感じの学校を作るとか、そういった事をイメージして考えればいいのでしょうか。

事務局

岩手県などで農業高校と工業高校を一緒にするとか、そういった形のものが出てきています。しかし、果たしてそれが良いのかどうかという事があります。

佐々木（昭）部会長

そうすると、我々がお金の事を考えなくてもいいのですが、そういう複数の専門高校を一緒に統合する事を考えると、財政的にはやはり手当もしなくてははいけません。施設設備についても必要だとなればなんとかしなくてははいけないでしょう。

C委員

農業も工業化されてきている訳ですから。

佐々木（昭）部会長

販売をメインでという事ですか。

C委員

はい。後は商業の面も、ただ百姓は野菜を作っていればそれでいいのではなくて、いかにして売るか、いかにして付加価値を付けるかという事になれば、商業の方へも入って行くでしょうし、これは可能性としては考えて良い事だと思います。

佐々木（昭）部会長

これもこれからの話し合いの流れを見ながら、意見が出せるか出せないかという事です。全体的に可能性はあるのだろうという事だと思うのですが。それでは5ページの（ウ）の地区毎の学校配置ですが、現在例えば6地区に分かれているそれぞれの地区の中の学校数が、あるいは学校規模が将来的にどうですかという事だと考えていいのでしょうか。

事務局

募集定員や通学圏や実際の動きを考慮すると、大体6地区において生徒の動きがあります。このような範囲で学校の在り方を検討するのが6地区の考え方です。

C委員

先程の統廃合の基準をどうするが、地区毎の配置をどうするのか、校舎化になってそれからどうなるのかという事につながってくるものですから、これは事務局の方からも話がありましたが、基準は2学級以下になったら廃校に持って行きましょうという考え方でいいのですか。

佐々木(昭)部会長

少なくとも平成20年度まではそういう考え方でいいのですよね。平成20年度までの結果はもう出てきていますから、平成20年度までは我々が何を言おうが、大体その方向で進められています。我々は、平成21年度以降はどうしますかという事ですから、平成21年度に2学級の学校がどのくらいあるかという事です。

C委員

これは平成21年度からの事でしょう。今やっているのは。

佐々木(昭)部会長

前にもらった資料ではどうだったでしょうか。2学級以下の学校は整理されているのですか。その時点でたくさんあるのですか。事務局どうですか。

事務局

第2次実施計画はまだ進行中であり、平成20年度の事は決定ではないという前提でお話させていただきますが、最終年度の平成20年度の時点では、東青では2学級募集の高校はなくて、1学級募集が今別高校と平内高校です。下北については大間高校が2学級募集、大畑高校と川内高校が1学級募集という事になります。

佐々木(昭)部会長

校舎という名前になって、残って1学級ですね。

C委員

現在も1学級ですよ。

遠島副部会長

今年から1学級です。大間高校が今3学級で、それが平成20年度に2学級になります。

佐々木（昭）部会長

1学級の所を残したいのはやまやまですが、それに対する教員配置等の様々な事が出てくるのです。望む、求めるような教育効果が旨く行かないという事になります。

C委員

専門委員会では、まだその基準は出てないのですか。

A委員

この5ページの高校長協会の意見にあるように、通学区域が全県一区になったと言ってもできる事なら親元から通学できる範囲に高校がある事が望ましい、というのは誰もがそう思うのではないですが、この左側の専門部会の、(ウ)の3つ目の内容との兼ね合いはどうなるのかと思うのです。この全県的視野での統廃合というのは先程も出ていましたけれども、全県的視野での統廃合というのは、要するにもっと大きい、例えば人事異動と同じで他管交流みたいにどんどん動かしてという意味なのでしょうか。例えば八戸に2つ作って、その分東青は減らすというような意味での統廃合なんでしょうか。全県的な視野でというのは、そうしないと意味が通らないのかなと思います。

佐々木（昭）部会長

あまり深い意味はなさそうですが、全県的視野での統廃合は必要だし、地区毎に考えてもそうではないかという程度だと思います。

事務局

ここの所なのですが、単純に今の6ブロックという考え方を見直すかどうかという事です。全県的視野というのは全県的に子供が減って行くという事を踏まえてですので、県全体で子供達を移動させるという意味ではありません。既存のブロックの形を変えるかどうかという事です。

A委員

この専門委員の方の考え方では、地区のバランスは当然考慮すべきという点では高校長協会の考えと同じです。文面からいくと、各地区にこういう学校を設ける、そしてこれは全県的な視野という条件がかかった場合に6ブロックを踏襲していった方がいいかどうかという話です。ですから、その辺を勘違いしているのかなと思います。全県的視野での統廃合というのはそういう意味だと思います。

事務局

全県的視野の部分は、あくまで6ブロックの見直しをするか、という事で見てください

い。

A 委員

これは踏襲すべきかどうかを再検討する必要はないという事ですね。

佐々木（昭）部会長

高校長協会の意見にある、親元から通学できる範囲にあれば望ましいというのは、これは誰もが皆そう思うのですが、そうは言ってもらえません。今は小さい学校を校舎化して、更には統廃合をしなくてはいけないという状況なのです。

A 委員

これは単純に考えて、ある地域からその職業高校が1つなくなる、どこかにくっつけるのかもしれませんが、そういう議論であれば大問題になる訳です。通えなくなるのですから。そういう事を言っているのかなと思いました。

佐々木（昭）部会長

先程副部会長が言った下北地区のスクールバスの件も含めて、とにかく親元から通うと言うのであれば、下北地区ではちゃんとそういう専門高校も普通高校もあります、というくらいの話だと思うのですが。

遠島副部会長

お話を聞いていて、6ブロックの考え方を考え直すという事は、例えば下北と青森を一緒にしますので、青森に工業高校がありますから下北にはいません、という意見を言っているのではないかという気がします。

佐々木（昭）部会長

地区毎の学校配置をどうするかという時のブロックとは、例えば下北と東青を一緒にするような事は別にしても、下北と野辺地まで含めて1つのブロックにしますとか、そういう組み替えを含めた考え方だろうと思うのです。下北と東青というと、割と違うのではないかという感じもしますし。地区や市町村合併を見ながら、という事ではないでしょうか。中身の真意と言いますか、細かい所は我々に対応しきれない部分ですが。

A 委員

あくまでも高校長協会の上の方の意見です。これはやはり、色々な意味で我々が守っていかなくてはならない部分だと私は思います。

佐々木（昭）部会長

それでは、第1専門委員会の部分について、様々な意見が出たようですが、時間ですのでここで休憩をとりたいと思います。

~~~~~ 休憩 ~~~~~

佐々木（昭）部会長

第2専門委員会の方は社会の変化と多様な進路志望に対応する学科・コースの在り方という事で、専門委員会ではまず第一に社会の変化についてどう捉えるかという議論になっています。委員それぞれに意見はあると思いますが、特に社会の変化について高校と絡めて何か言いたい方はいらっしゃいますか。

それでは様々な社会の変化を踏まえながら、の学科・コース等の今後の方向性という事についてお話いただければと思います。これは全部込みでという事になります。まず4ページまで行きましょう。各学科・コース及び系列の検証という事で、第2専門委員会の方で出された意見では、特に2ページの、普通高校に併設されている英語科とか人文学科とか理数科等の専門学科、学年1学級しかない学科は、機能してないと言う意見です。ただ、スポーツ科学科以外は廃止と言うのですから、スポーツ科学科は活きていると捉えて良いのでしょうか、そういう意見があるようです。高校長協会の意見も、人文、理数、英語科については倍率が定員に達しない所は存廃含めて検討する必要があるという書き方です。当初の設立時の目的と言いますか、存在価値みたいなものがかかり薄れてきている様子があるのだと思います。スポーツ科学科は人気があるという事ですか。

事務局

倍率は以前に資料でお配りしていますが、平成16年度はスポーツ科学科が1.37倍です。これは一次調査の志願倍率です。調査は2回行って、一次調査はある意味、最初に行きたいという思いの下それぞれ中学校の進路指導を経て出された数です。平成17年度が1.38倍、そして平成18年度が1.48倍となっています。また、理数科、英語科、外国語科、美術科、スポーツ科学科、人文学科、表現科ですが、黄色の部分が定員割れを示しています。唯一定員割れしていない学科がスポーツ科学科です。平成16～17年度につきましては美術科も定員を割っていませんが、平成18年度に関してはスポーツ科学科だけで、それ以外は志願倍率が1～0.6倍の間くらいになっているという状況です。

補足すると、平成19年3月中学校等卒業予定者の進路志望状況第1次調査が18年11月15日に発表になっています。東青地区ではスポーツ科学科は青森北高校にありますが、これは1.05倍です。中南地区では弘前実業高校で1.65倍、三八地区では八戸西高校で1.73倍です。

佐々木（昭）部会長

3地区について出ましたが、スポーツ科学科というのは他の専門学科よりも、施設の面でそんなにお金がかからないのですか。

事務局

少しかかっている部分もありますが、倍率だけでは少し見れないとも思います。進路の問題を考えると、大学へ行かなければそういう関係の道はなかなか開けてこない訳ですよ。

佐々木（昭）部会長

スポーツ科学科について、早い所でもう進路が出た学校はあるのですか。

事務局

卒業生は出ています。進路状況ですと、スポーツ科学科の進学率は、平成16～17年度は5割くらい、平成18年度は53%となっています。

B委員

下北にいて、副部会長が先程も言っていたように、英語科は残して欲しいと自分は考えていました。1学級だけ存在する機能しない学科、英語科とかそういうものはやめろという意見があるようですが、是非何とかこれからの社会の中で英語の持つ意味は大きいと思いますし、東通村では英語の特区という事で小学校からやっていて子ども達がどんどん英語教育に関して色々やっています。副部会長から1回学校訪問を受けて、色々子ども達の進路の事について説明を受けた時に、確かに凄く頑張っているのだなと思いました。確かに倍率的に見ると、今年の段階では1倍に満たない状況があるのですが、子ども達の凄い頑張りが見れるなと思いながら、我々もその辺の事に関してもう少し子ども達に説明して行けば、きっと下北の中で1倍をクリアできる状況がくるのではないかと考えています。是非そういう意味で、何とか残してくれるとありがたいと思います。

C委員

ある程度は下地ができていないと受け入れられないと思われているのではないですか。

遠島副部会長

実際は、普通科の生徒と英語科の生徒であれば、英語科の生徒の方が全般的な学力は低いです。英語を含めてです。ただ、入ってきた生徒達がどうなっていくかというと、今ありがたい言葉をいただきましたが、英語の専門科目は25～29単位くらいありますのでコミュニケーション能力が非常に育ちます。人見知りしないとか、それまで人前

で発表できなかった子が発表できるようになるとか、そういった生徒が育っています。それは何故かという、姉妹校のポートエンジェルス高校へ毎年ホームステイしながら語学研修をしています。これが食べたいとか、ああしたいこうしたいと自分で言わなくては暮らして行けませんので、そのために必死に勉強します。そしてアメリカ人と交流します。そういう成績が低い生徒が入ってきているにも関わらず、大体5年間調べましたけれども、英検準2級を88%の生徒が取得して卒業しています。2級は30%の生徒が取得しています。それから進路も推薦入学等の国公立の数が出ましたけれども、学校全体で24人で、英語科は4人です。従って人数の割合にはちゃんと入っています。行き先を見ますと、横浜市立大学、北海道教育大学函館校、山形大学、宇都宮大学と、普通科からではもしかすれば入れなかった生徒がプレゼンテーション能力等を高めてそういう大学に入学できているという事です。0.4何倍という倍率はありますけれども、在籍率では大体いつも8~9割は確保しています。第2次志望ですけれども。従って廃止となった時には、黒石高校などと同じくコース制とかはありますが、今の教育水準を落とさないようなコース制でないと、むつ市や東通村がやっているような事から、地域の理解は得られないのかなと考えています。

#### 佐々木(昭)部会長

田名部高校は英語科を一生懸命に頑張っている学校だと思いますが、一般論からいくと、普通科に併設された人文学科・英語科・理数科あたりは普通科に入りたくても入れないという子供達が次に狙うという傾向になってきています。理数科が一番最初にできた当時は、理数科が逆に学校全体を引っ張って行くという役割を持っていたのですが、どうしても専門科目に集中する時間が多くなりますから、他の科目の部分が少しだけおろそかになるという傾向があります。全体的に大学進学という事を考えた場合に、少しハンデになるという危険性もありますし、併設されてる専門学科は次第に整理されつつある学科であるのは間違いないです。ただ、田名部高校みたいに存在価値を認めて努力し成功している学校も何校かありますけれども、全体的にはやはり考えた方がいいのではないかという意見の方が多いと思います。スポーツ科学科もこれから何年か、長い目で見てみる必要はあるという感じはします。普通科に併設された専門学科、それから各職業学科の方の意見については、これは学科毎にかなり変わります。

について、細分化、専門化する事に疑問ありというところでしょうか。学科名はもっとシンプルにして、あまりカタカナで限定したような、イメージの湧かないような学科名ではない方が良いという意見のような感じがします。

#### 遠島副部会長

学科を細分化したのは工業高校の場合なのですが、実はコンピュータで動かす機械、機械が高度化してからこういうようになったのです。どうしてそうなったかという、例えばロボットを考えてみますと、ロボットを作る、または操作する学習を生徒にさせ

るのにどういう方法が良かったかという、機械を勉強した生徒がコンピュータや電子などを勉強してロボットに携わるというのが一番良かったのです。ですから、現場ではそのように考えていました。しかし、そうはならないで、電子機械科を作ったのです。なぜ電子機械科を作ったかという、機械科が2学級ある所を電子機械科と分けたのですが、国の物を買う基準、産振の基準というものがあって、現在必要な機械を既存の学科では買えないのです。新しい先端的なものをやる学科でないと買えないという事から、細分化せざるをえなかったのです。そろそろ、その役割は終わったので、また元に戻すと言いますか、収束してもいいのではないかという意見はたくさんあります。

佐々木（昭）部会長

カタカナの学科を増やしたというのは、職業学科に対する特色作り、魅力作りという要素もきっちり働いていたと思います。ところが逆にそれが狭くすると言いますか、出口の所も狭めてしまっている危険性があるのではないかという感じがします。

遠島副部会長

それはあります。

佐々木（昭）部会長

専門委員会の意見は、もっと基礎的に幅広くという意見に感じるのですが。

F 委員

先程の話を聞きましたら、例えば田名部高校の話で、田名部高校はむつ下北において進学校と言われる一番の高校です。その中で普通科に入れない生徒が英語科に入る事で、助け船になっている部分もあるとおっしゃっていました。これは大切な事だと思うのです。人というのは中学校で伸びる場合もあれば、高校で伸びる場合もある訳です。その時に、こういう子は必要ないからなくしたという事でなく、助け船的な部分もあった方が逆にいいのではないかと私は思うのです。例えば田名部高校という名前で普通科と英語科があり、方向性は違うものですが田名部高校に入れるのだという、そういうセーフティーネットと言いますか、そういうものがなくなるとますます定員が減らされますので。

佐々木（昭）部会長

仮に田名部高校で英語科を止めて、普通科に転科するとなればどうなりますか。

F 委員

そうした場合に、例えば成績のレベルが低い人が英語科に入るのですよね。普通科でレベルが高い所には入れないのだけれども、同じ田名部高校でも少しレベルを下げた所

に英語科があって、そこに入れるという話ではなかったですか。

佐々木（昭）部会長

例えば、今は普通科6学級ですので、英語科1学級で、トータル7学級です。6学級では入れないけれども、7学級になったら入れるという計算をすればどうでしょう。

F 委員

それでしたら、もしかしたら良いのかもしれませんが。

佐々木（昭）部会長

つまり英語と言う事にこだわらなくても、要するに高校に入って勉強するという仕組みの中に入れれば幸せだということですか。

F 委員

そういう事です。それが6学級が7学級になるのであれば良いと思います。それで入りやすくなるのであれば、もしかしたら良いのかもしれませんが。ただ1学級減ってますます厳しくなるのであれば、英語科でも理数科でも人文学科でも設けて、もう1回チャンスを与えるという事がいいと思います。

C 委員

田名部高校が英語科を作ったのは、私も長年教育関係で関与してましたので分かるのですが、衛生看護科が廃止になって1学級減になるものだから、それで英語科という形を作った訳ですよ。実際、現在にはどうなっているのかは分からないのだけれども、英語科というのは少しハイクラスな学科だという感じを持っていたのですが。助け船という事が先程出ましたが、私が先程話した総合学科がそういう部類に入るのではないかと思っていました。

遠島副部会長

英語科が設置されたのが平成7年で、衛生看護科が閉科したのが平成16年です。

C 委員

平成16年という事なら2年前ですね。もっと前ではないですか。

遠島副部会長

3年生までいなくなったのが2年前です。

佐々木（昭）部会長

募集停止はその3年前ですね。

#### F 委員

例えば青森の進学校というのはちょっと分かりませんが、そこでももしかしたら理数科とか、人文学科とかがあれば、そこを狙って入って来る人もいないか考えられます。高校で伸びるのであれば、先ほど田名部高校の英語科に入って普通科よりも伸びる方もいるとおっしゃったように、再チャレンジと言いますか、中学校は駄目でも高校でそういう環境下にあって、普通科が隣にあり、少しレベルの低い英語科でも人文学科でも、ぐっと伸びるような人材ができるのであれば、それはそれで良いのではないかと思います。

#### C 委員

確かにそれはありますね。

#### 佐々木（昭）部会長

青森市内で外国語科を持っているのは青森南高校です。それから、人文学科を持っているのが青森西高校です。スポーツ科学科が青森北高校で、昔は青森東高校に理数科がありました。今はなくなっていますけれども。

#### C 委員

理数科というのはやはり進学ですか。

#### 佐々木（昭）部会長

当初は要するに理科・数学に強くて進学希望者がその理数科に入って、その学校全体を進学高校として行くんだという考え方です。最初のスタートの辺りはそうでした。

#### C 委員

医者や看護の学級もそうなのですか。

#### 佐々木（昭）部会長

医者などの志望者はいたかもしれませんが。県内各地区にあったのですよ。むつ下北にもありました。ところが数年前から逆転現象が凄くて、もう10年くらい前から逆転現象が起こって普通科の方がレベルが高くなりました。入学者の進学率を見ると理数科の方が少し下だという状況が生まれてきています。八戸北高校だけはずっと逆転せず、ずっと理数科が引っ張って来ました。

#### 事務局

1学級しかないという事が敬遠されたりする場合があります。そういう意味では厳しいです。

佐々木（昭）部会長

その学級だけ3年間生徒が入れ変わりませんから。そういう要素はあります。

遠島副部会長

人間関係が旨く行かない時に困ります。

佐々木（昭）部会長

専門高校の細分化と言いますか、その辺りはいかがでしょうか。なかなか議論しにくいテーマです。

C委員

今はどうなのでしょう。学力別に学級分けというのはできないのでしょうか。やっ  
てる学校はあるのでしょうか。昔はありましたよね。

佐々木（昭）部会長

今はむしろ類型別と言いますか、要するに国公立大学進学を希望してる学級と、私立  
型の学級と、専門学校を目指してる学級と、純然に就職を目指してる学級とか、そうい  
う分け方をしてるのが普通です。一般的には普通科は横並びで、成績優秀順にという分  
け方は今はあまりないのではないかと思います。

C委員

例えば普通高校の進学校の場合に、国公立を目指す学級とか、ランク付けする訳では  
ないけれども、そういう分け方を例えば2年生からするなどできないものなものでしょ  
うか。

佐々木（昭）部会長

できます。ただ、どこを志望するかによって、どの科目を重点的に勉強した方が良い  
という事がありますから、どうしても類型毎に分けるのが一般的な形です。大体2年生  
からという事です。それもある程度の学級数があってスタッフがちゃんと揃っている、  
という学校に限定される危険性があります。どの学校でもできる仕組みではないです。  
ですから、学級数が少ない所は進学中心、就職中心と分ける所もあります。

C委員

それが一番良いような気がします。やはり子供達も保護者も敬遠しますかね。就職



の方が楽だというのは旨くないですね。

#### D 委員

学級数が少ないと、先程委員長がおっしゃいましたけど、国公立、私立、プラス理系、文系とこう分ける事はできません。

#### 佐々木（昭）部会長

私も今この資料を見て、むしろ普通高校で就職を売りにした学校というのは伸びるのではないかと思います。うちの学校に来れば全員就職できます、という学校にすればこれは1つの売りになるのではないかと思うのです。この就職難の時代に夢のような話だとは思いますが。

#### D 委員

大学へ入学するより難しいです。

#### E 委員

かつて商業高校がそういう傾向にあって、金融関係、例えば銀行などからもたくさん求人が来ていたようですが、今はパチンコ屋から求人が来れば御の字だと言います。就職を売りにした商業ですらそういう状況です。

#### A 委員

先程の機械科と電子機械科のお話ですけれども、そういう例は他にもあるのですか。例えば書いてあるとおり細分化を止めて学科を統合するという事は、機械科をなくして電子機械科という学科にして、その中で電子的なものをメインにして行くものと、機械をメインにして行くものと、合体させたものという事で流動的にやって行けるような形であれば、再編、統合という事では、むしろ良いのかなと思うのです。そういう可能性のある所は他にもあるのですか。

#### 遠島副部会長

電気科と電子科もそうです。電気科から電子科が分かれて行ったものですから、これも統合できると思います。基幹学科として機械系、電機系、土木か建築の建設系の3つなのです。色々なものがここから派生していますので、3つに統合するという事は十分可能です。

#### A 委員

インテリアなどと言っても、自分のイメージしていたものと中身はとても違っていて大変だという場合もあるのでしょうか。商業の学科でもそういう部分が多分あるのではな

いですか。

佐々木（昭）部会長

商業でも大分中身は変わっています。

A 委員

情報とか会計とかがありますし。そういう意味では当を得ています。

佐々木（昭）部会長

ではその話の延長で、第1専門委員会の一番最後にある括り募集に話を移してみます。つまり、今お話のようにそれぞれ小学科と言いますか、専門の学科があるのですが、例えば、最初は学科毎に分けて募集をしないで全体でまず募集します。ですからまず工業高校なら建築系、電気系というよう括って募集し、2年生からそれぞれの学科に行くようにするという考え方が括り募集です。その括り募集について、専門委員会は比較的賛成が多いようですが、こういった募集方法についてはどうでしょうか。

D 委員

括り募集というのは、実際大学でも大雑把に工学部や法学部という事で募集し、一般教養を1～2年やって、3年生から専門に分かれて行くという事があります。私の友人が非常に痛い目にあっていて、某有名私立大学の文学部に入り、自分はフランス文学を専攻したいという事だったのですが、2年生から3年生になる時にやはり成績順で専門を分けられてしまうのでフランス文学に行ったのは女子大生がほとんどだったという事でした。ですから、これは非常に学校で勤勉にメモをとり、試験はある程度の成績を取っていた真面目な子ども達にはいいのですが、本当に自分がやりたい物に対してそういう選別があるというのは非常に難しいと思うのです。結局3年生の時に大学を辞めて、また別の大学に再入学しました。そういう意味では、本当に自分が例えば工業で機械をやりたいという意志で工業高校に入学して、いざそういう段になって電気の方に行くというケースも充分考えられる訳です。この辺が私としては、今の高校生にはどうかなという気がします。

佐々木（昭）部会長

第1専門委員会では、括り募集に今のような問題があるという意見は出たのですか。

事務局

第1専門委員会の中で、今のお話のような経験をした委員から、希望に叶わないという事があるという事を踏まえて、十分な配慮が必要であるという意見がありました。

佐々木（昭）部会長

括り募集というのは、総合学科の募集と同じだと考えると叩かれるのでしょうか。つまり、総合学科も1年次は共通履修をして最終的に希望する系列に入ります。その専門性を更に強めたのが、今の専門学科の括り募集という感じもします。

A 委員

総合学科の場合、系列に入ってというのはどういうものなのでしょうか。

佐々木（昭）部会長

多分人数のでこぼこの調整はあるのではないかと思います。

A 委員

そうすると本人の意志と違う事になりますね。

F 委員

振り分ける時に、実力があって努力したから行けるという事は大きいと思います。自分が行きたいから1年生の時に努力するのだし、努力しなければこっちになってしまうという事です。やはり高校生ですから、小中学校とは違うのだと私は思うのです。

佐々木（昭）部会長

例えば工業高校なら工業で募集しておいて、1年次に希望を取って振り分けるというのが普通なのではないでしょうか。入学する時から基本的な希望を聞いておかないと、括り募集する意味がないのではないのでしょうか。

遠島副部会長

要するに、機械科と電子機械科は機械系の括り募集で、電気科と電子科は電気系の括り募集という形でやっている所が多いのではないのでしょうか。しかし、今のお話のように学科をまとめようとするのであれば、括り募集をしなくてもいいのではないかと思います。工業高校と言いますか、専門高校は何をやりたいのか目標を定めた生徒を入れようという学校です。普通高校というのは大学へ行き、総合学科というのは何をやりたいか学校へ行ってじっくり考えて卒業するまでに検討する、という事を位置付けている事からすると、全体の括り募集というのは少し抵抗があるのではないかと思います。

佐々木（昭）部会長

高校長協会の方には、括り募集と言う事についての意見を求めているのですか。

事務局

同じ検討テーマでお願いしていますので、高校長協会の意見は10ページになります。

佐々木（昭）部会長

必要性を述べる意見も多いです。専門高校と言っても、職業学科の持っている特性と設けている小学科の中身により様々違うだろうという感じがします。やはり工業高校なら工業1本で物を考えて良いかという、できる学校もあればそうしにくい学校もあります。これはもう少し専門委員会の方の議論の推移を見ながら、もう1回考える事にしましょう。それでは最後に、下北の原子力学科を含めて統廃合による新しいタイプの高校の可能性はどうだろうか、という所を話題にしたいと思います。

C委員

これは私が発言した事なのですが、地域性を考えると新しい学科・コースという事では、下北の場合はまず原子力だろうと思います。それから海洋科学科もあるでしょうし、観光立県ですので観光でとにかく地域を活性化して行くという事からすれば観光科も考えた方が良いでしょう。これはどうなのでしょう。その地域にはその専門家がいる訳ですから、そういう方々を臨時講師として講義をしてもらおうというやり方というのはできるのですか。

佐々木（昭）部会長

現行でもできます。社会人講師とかはやっていますので。

C委員

できるのですか。やってる所もありますよね。

事務局

あります。

C委員

そういう事を大いに利用する事によっては、これは可能ではないかと思います。必ずしも、それに精通した教員がいなければならないという事ではありません。

佐々木（昭）部会長

具体的なイメージの中には、田名部高校の生徒を除いて、川内高校と大間高校で行うという事があるのですか。

C委員

実はその救済なのです。

佐々木（昭）部会長

人数の配置とか存続の可能性から見ると、大間高校あたりをメインにして、という事で聞いていいのでしょうか。

C 委員

私は逆に廃校になった時に校舎が残ると、その校舎をどうするという事になります。そういう意味で私は言ったのです。

佐々木（昭）部会長

例えばむつの隣町を川内と考えてみて、川内や脇野沢の中学生の数が将来的にどうなるかという事と、そんな事は考えないで全県的にその学科の勉強ができるならそこに来るだろうという事で募集する、という事を考えているのですか。

C 委員

もう1つですが、田名部高校に入れないので、同じ普通科という事で川内高校だとか大畑高校に行っている子供達がいるのです。子供も保護者も何となく世間体悪いと言いますか、そういう形になっているのです。これが専門学科と言いますか、そういう教科を学ぶという事になれば、これは凄く子供達にとっては良い事なのです。普通校というのは田名部高校1つで良いと思います。後は例えば原子力を勉強したい、海洋科学を勉強したいという子供達がいると思うのです。

佐々木（昭）部会長

これは第1次教育改革と言いますか、高等学校の学科を考えた時に新しい特色ある学科を作りましょうという中で、例えば十和田西高校に観光科ができた時に、あの時に下北あたりに水産関係で海洋水産、海洋スポーツなど、そういった関係の学科を考えようという議論が出た記憶はあります。しかし、あの時代はまだまだ生徒も潤沢にいたので、それぞれの地域の学校に特色を持たせなくてはいけない雰囲気というイメージだったと思います。今は学校の整理統合をしなくてはいけない時なので、地域にこそ特色を持たせた学科という意見が出ても。

B 委員

原子力とかもおもしろいと思って聞いていました。それこそ工業高校の中に、あるいは独立した形で原子力産業に関わる学科・コースを作った時に、実際に求人の需要としてあるのか、全国的に考えた時に原子力産業に関わる事が高校レベルで対応できるものか、そういう事がもし対応できるのであれば大間にしても東通にしても中間貯蔵の問題にしても、その学校に入ると出口がきちんとある、場合によっては全国に行けるという

魅力ある学科になるのでは、と思いながら聞いていました。

#### C 委員

宮城県などでも原子力センターと言いますか、訓練センターがある訳です。ですからそういう知識を身に付けて覚えて、訓練センターに行って実際に携わる事ができるという形は充分とれると思うのです。

#### B 委員

全国で高校の中には、原子力に関わる学科はあるのですか。

#### 事務局

原子力という学科はありません。ただし、環境エネルギーという科が全国に3つあります。傾向としては電気と工業化学の系列になっていて、化学系に近かったり、電気系に近かったりするのですが、それに環境部分を加味した学科としてあります。

#### F 委員

確かに原子力というのはむつ下北で本当に中心になっているような感じなのですが、大学を見ても原子力学科は軒並みなくなっています。なぜかという人気がないからです。しかし、日本の原子力の技術というのは世界で最高です。大学に原子力学科がなくなって、日本に原子力の必要性が謳われている時に、これから技術はどうなるのだという事を考えると不安になる訳です。ですから、もしかしたら原子力学科を高校に作るというのは、ある意味チャレンジであって良いのかなと思います。

#### 佐々木（昭）部会長

名前は環境みたいな感じで、ストレートに原子力学科でなくてもいいですよ。

#### C 委員

下北半島というのは、原子力半島と言われるくらい設備が整ってきている訳ですが、地域感情としては、他所者ばかり来て地元の人がない、と感じます。六ヶ所の場合は六ヶ所の住民が結構いますが、やはり地元の人が携わって初めて住民の理解が得られるものだと考えています。

#### 佐々木（昭）部会長

地元感情としては、学校の廃止よりも原子力学科を新設するという事に対する抵抗感というのはどんなものでしょう。

#### C 委員

それは反対する人は当然います。簡単には行かないでしょう。

#### F 委員

そこに100%就職できるという事があれば、凄く人気になるかもしれません。

#### 佐々木（昭）部会長

問題はあるようですが1つのアイデアという事でしょうか。全般について皆さんから何か意見はございますでしょうか。多分まとまらないのが、この会議の良い所だと思うのですが。地区部会も専門委員会の検討の中身に少し左右される部分もありますが、あと3回程この地区部会も開催されるという事ですので、今日話し忘れた事でも残り3回の中でどんどんお話いただければと思います。副部会長から何か最後にありますか。

#### 遠島副部会長

第1専門委員会から出た市部と町村部の適切な学校規模という事で、むつ下北の場合に当てはめて、あそこの学校が何学級とシミュレーションしてみました。そういう話にそろそろ入って行く必要があるのではと思います。

#### 佐々木（昭）部会長

多分、次回以降の専門委員会の話題はきっとそこでしょう。

#### 事務局

個別の学校についてまで、その会議の中で出していただくとは私達の方では認識していません。検討会議の中でこれから協議になるとは思いますが、個別の学校名という形ではなくて今後の方向性を示していただければと思っています。

#### 佐々木（昭）部会長

事務局と専門委員会の立場はそうでしょうけれど、私達は地区の意見の反映ですから、その中では個別の名前を出しながら考えて、それをトータルで全体的に吸い上げてもらえれば、という気持ちで良いという事ですね。

#### 遠島副部会長

そうですね。例えば普通科が例えば6～7学級になった時に、あそこの学校だからこうだ、それでいい、それでは駄目だ、とかいう事になるのだらうと思いますので、具体的にここをこうしてくれと欲求するのではなくて、各数字を裏付ける根拠として、やはり具体的な学校をあげたいと考えています。

#### 佐々木（昭）部会長

それでは、次回以降はそのあたりを中心にやります。という事で、予定していた時間になりましたので、これで第2回の地区部会を終了させていただきます。

閉会

司会

本日は大変ありがとうございました。この地区部会も更に回を重ねます。今後の予定につきましては、事務局から連絡を差し上げて調整して行きたいと思います。今後の会議の方も更に積み重なって行くと思いますが、その都度貴重な意見をたまわりたいと思います。本日はどうもありがとうございました。